

## 〔論文〕

# ニュッサのグレゴリオス『モーセの生涯』における φωνή の思想<sup>1</sup>

土井健司

## 1. はじめに

ニュッサのグレゴリオスの『モーセの生涯』<sup>2</sup>において φωνή (声・音) がどこで使われ、どのような意味を担っているのか、これらを調査し、考察することで、グレゴリオスが φωνή についてどのような思想を有していたのかを明らかにすることが、ここでの研究の目的となる。

いつものようにギリシア語文献のオンライン上のデータベースである TLG を用いて用例を集めるが、その際 φων- を入力して検索を行った。その結果、変化形毎に分けてみると、φωναί (複数・主格) が 2 例、φωναίς (複数・与格) が 1 例、φωνας (複数・対格) が 5 例、φωνη (単数・主格) が 14 例、φωνη (単数・与格) が 6 例、φωνην (単数・対格) が 10 例、φωνης (単数・属格) が 13 例、そして φωνητικον (形容詞) が 1 例、合計 52 例が確認された。これら 52 例についてその用法を確認したのが、表 1 となる。以下随時この表を参照することを前提として進めて行く。また『雅歌講話』においてと同様、一つひとつの用例における φωνή の意味を確認するにとどまらず、文脈でとらえる必要のあるものもあることも指摘しておきたい<sup>3</sup>。

なおこのような研究方法は、いわゆる人文学的な読書とは異なり、いわば『モーセの生涯』をひとつの対象物に見立ててこれを切り刻むような行為であって、どこかサイエンスの実験的などころがある。しかしそれでも、そのようにして初めて見えてくる事柄もあるのであって、その限りでこのような方法にも意味があると考えている。

---

1 この論文は、2023 年 9 月 7 日に日本基督教学会学術大会（上智大学）において同じタイトルで口頭発表した原稿に修正し加筆したものとなっている。なお同年 10 月 25 日の関西学院大学の神学研究会においては先の口頭発表したものと同じ内容を口頭発表していることも付記しておきたい。

2 使用したテキストは、次の通り。J. Danielou, s. j. *Gregoire de Nysse La vie de Moïse*, SC1, Paris, 1968. 適宜参照したのは GNO VII, Pars I に所収の H. Musurillo ed., *Gregorii Nysseni De vita Moysis* (Leiden, 1964) である。翻訳としては上記ダニエルーによる仏語訳、また英訳 (A. J. Malherbe, E. Ferguson tr., *Gregory of Nyssa The Life of Moses, The Classics of Western Spirituality*, Paulist Press, 1978)、そして日本語訳 (谷隆一郎訳「モーセの生涯」、『キリスト教神秘主義著作集 1 ギリシア教父の神秘主義』所収、教文館、1992 年、7—136 頁) を参照した。

3 『雅歌講話』におけるフォーネーについては、次の拙論を参照。「ニュッサのグレゴリオス『雅歌講話』における「声」の神学」、『基督教学研究』第 42 号、2023 年、23—67 頁。

ところでグレゴリオスの著作全体における θεία φωνή の用例と用法については以前に研究を明らかにしているが<sup>4</sup>、その論文での成果と、今回対象を『モーセの生涯』に限定しつつも、しかし φωνή 全般について調べた結果とを比較して、前の論文に誤りがなかったのかどうか、最初に確認しておきたい。

用例としては、第一部 11 節、同 12 節、第二部 165 節、同 219 節、同 220 節、同 232 節、同 246 節、同 250 節、同 254 節、同 319 節、以上 10 個所に確認されるが、前の論文の表と同一となっており、用法についても同じ結論が確認される。つまりこれらにおける θεία φωνή はいずれも聖書箇所を指示している点で共通している。イザヤ書 51 章 2 節（第一部 11 節、同 12 節）、出エジプト記 20 章 21 節（あるいは詩編 17 編 12 節）、出エジプト記 33 章 11 節、そして出エジプト記 33 章 18 節から 23 節（いずれかの節）を意味するものが第二部 165 節、同 219 節、同 220 節、同 232 節、同 246 節、同 250 節、同 254 節となり、そして出エジプト記 33 章 12 節と 17 節を指すのが第二部 319 節の用例となる。これらに共通するのは聖書箇所を指示することである。さらに踏み込んで言えば聖書における科白を指す傾向があると指摘することはできるかもしれない。いずれであれあくまでも聖書に記されている言葉が「神の声」(θεία φωνή) と記されているのである。

なお反対に聖書箇所を指示する場合はすべて「神の声」と記されているわけではないことは確認しておきたい。この点について『モーセの生涯』第一部の序論にみられる用例を確認してみたい。11 節の冒頭で「ところでこれについて聖書を相談相手として用いる・・・というのもイザヤを通して神の声は・・・聖書はこれをアレテーの外を彷徨っている人びとに向けて命じている。」とあるが、ここで最初に「聖書」と訳したのは τῆ γραφῆ であり、「神の声」は ἡ θεία φωνή、そして三つ目の「聖書」は ὁ λόγος である。三つ目の「ロゴス」は御言葉（即ちキリスト）と訳すことも可能であるとは言え、ここで三つの言葉をグレゴリオスは使っている。さらに 14 節の冒頭にある「ロゴス」(ὁ λόγος) は文脈上「聖書」を意味するのであり、また 15 節冒頭には「神的書物」(τῆς θείας γραφῆς) も用いられている。こうした同一文脈において同じ「聖書」を表現するのに三つの言葉が使われており、これら三つに有意な相違を確認するのは難しい。敢えて言えばここでは「神の声」(ἡ θεία φωνή) は預言者イザヤの発した言葉、つまり科白のニュアンスで使われていると見てよいだろう。しかし先述の拙論でも明らかにしたように、θεία φωνή が必ずしも科白の箇所のみで用いられているわけではない。なお以下で φωνή はフォーネーと表記して進めて行きたい。

4 拙著「ニュッサのグレゴリオスにおける『神の声』の用例と用法」、『神學研究』第 68 号、2021 年、29 - 39 頁。

## 2. 第一部におけるフォーネーの用法

周知のように『モーセの生涯』は二部構成をとっている。この著作の意図は、モーセを理想の生の範型として描き、キリストに従ったアレテー（有徳）の生の営みを示すことにあるが、第一部では1節から15節までの序論につづいて、モーセの人生が簡潔に確認されていく。その際用いられているのは出エジプト記と民数記であり、その最期については申命記34章が使用されている。そして第二部では第一部で確認されたモーセの生涯を振り返りつつ、アレテーの生、完全なる生の道程を描いていく。ただし、そもそもその道程は一樣ではないのであって、モーセの事例もただ一つの範例にすぎない。従ってグレゴリオスは決してシステムティックな視点からステレオタイプなものを提示しようとはせず、2節に記されているように、丁寧にモーセの生涯を追いつつ、都度アレテーの生に有益となるような解釈を提示していくのである。

以上のような構成をとる『モーセの生涯』においてその第一部では、「声・音」はどのように用いられているのであろうか。第一部の用例数は13個所であり、次のように内容となる。まず聖書は全く関係のない用例は第一部の冒頭（1節）に見られる。馬車レースに熱狂する観衆が上げる「喚声」に言及され、アレテーの生に熱心に努める若者を応援する様子が描かれている。また序文に見られる用例はいずれもイザヤ書51章2節のことを指して「神の声」とされている（11節、12節）。

序文に続くモーセの生涯を描くところでは、まずモーセが最初に神の啓示を受けた燃える柴の場面で「光の声」と記し（出エ3章5節）、履き物を脱ぐように促されたことを説明する（20節）。さらにエジプト軍の追っ手におびえるヘブライ人たちを励ますモーセを指して、彼は「声と言葉」（τῆ φωνῆ καὶ τῷ λόγῳ）によって人びとを励ましたと言われる。該当する聖書箇所は出エジプト記14章13節であるが、ここでモーセは「恐れてはならない・・・」と声を出して励ましており、フォーネーに人を励ます力を読み取っているのであろう。また民数記22章以下に見られるバラムとロバの物語において、バラムに向かったロバの語り（民22章28節以下）がフォーネーと呼ばれ、またバラムがヘブライ人に向けて語った託宣（民24章3節以下）についてもフォーネーが用いられている（74節）。

『モーセの生涯』第一部においてフォーネーが最も多く用いられているのが44節となる。そこでは出エジプト記19章に登場するシナイ山での「音」、つまり雷鳴についての説明のなかで6個所にわたってフォーネーが用いられている。以下44節を訳出しておきたい。

視覚を通じた現象のみが魂を驚愕させるのみならず、聴覚を通じたものも恐怖をもたらすの

であって、天からのフォーネーがその下にあるすべてのものを驚かせたのであった。その最初の一撃でも皆の聴覚には耐えがたく、不快であった。それは別種のラッパの響きのようにであったが、そのフォーネーの重圧と驚愕とはその種のあらゆる楽器を超え出ており、近づくにつれますます恐ろしいものとなり、増し加わることで常により驚くべきものへとその響きを増大させていった。そのフォーネーそのものは、神の力によって、音声器官なしに空気が言葉を分節化することで、分節化されていた。その言葉は無秩序に発せられていたのではなく、神の掟を制定していた。しかもそのフォーネーは進むにつれて増大し、そのラッパは後続のフォーネーが前の音を常に凌駕することで自らを超え出ているのであった。<sup>5</sup>

以上となるが、ここには下線を引いた 6 個所でフォーネーが用いられている。聖書に記されている声・音の解釈として展開しているものであるが、ラッパの音あるいは雷鳴であればここでのフォーネーは「音」となるが、しかしグレゴリオスはこれを十戒の制定とつなげることで、分節化された言葉、つまり意味をもった「声」として解釈しているのは注目される。「音声器官なしに」というのも、喉や口なしにということであり、「声」のニュアンスを示唆している。さらに 19 節を踏まえて、この声が増すますます大きくなっていったという。こうした増大という点は第二部でも繰り返し指摘され、論じられることになる。

### 3. 第二部におけるフォーネーの用法

第二部は、第一部を踏まえてその観想が展開されていくが、第一部との関連性は厳格なものではない。つまり第一部で素描された出来事一つひとつの観想が第二部で詳細に展開されているわけでもない。たとえば第二部では有名なエペクタシス論が論じられ、これは主として出エジプト記 33 章 18 節から 23 節をもとにして展開していく。しかし第一部ではこの聖書箇所は取り上げられておらず、第一部の中には対応するものが認められない。他に第一部にあるのに第二部には対応するものがない場合もあり、第一部と第二部の関連性、連続性は厳格なものとして構想されてはいない。まずこの点を確認しておきたい。

<sup>5</sup> Ἡ γὰρ οὐ τὸ φαινόμενον τοιοῦτο μόνον διὸν ἐκπληξιν τῆ ψυχῆ διὰ τῶν ὀφθαλμῶν ἐμποιῆσαι, ἀλλὰ καὶ διὰ τῆς ἀκοῆς εἰσερχέτο τὰ φοβειρά, φωνῆς ἀνωθεν καταπληκτικῶς ἐπιρρηγνυμένης ἐφ' ἅπαν τὸ ὑποκείμενον· ἥς χαλεπὴ μὲν καὶ ἡ πρώτη προβολὴ καὶ ἀκοῆ πάση δυσάντητος ἦν, ἐν ὁμοιότητι μὲν τῆς τῶν ἄλλων σαλπιγγων ἤχης γινομένη, παριούσα δὲ τῷ βαρεῖ καὶ καταπληκτικῷ τῆς φωνῆς ἅπαν τοιοῦτον ὑπόδειγμα, φοβερωτέρα δὲ προιούσα ἐγένετο, αἰεὶ πρὸς τὸ καταπληκτικώτερον διὰ προσθήκης τὸν ἦχον αὐτῆς ἐπιτείνουσα. Ἡ δὲ φωνὴ αὕτη ἕναρθρος ἦν, θεία δυνάμει δίχρα τῶν φωνητικῶν ὀργάνων τοῦ ἀέρος διαρθρούτος τὸν λόγον. Ἡ δὲ ὁ λόγος οὐκ εἰκὴ διαρθρούμενος, ἀλλ' ἐνομοθέτει θεία διατάγματα. Καὶ ἡ μὲν φωνὴ προιούσα δι' ἐπιδόσεως ἤϋξετο καὶ ὑπερήχει ἑαυτὴν ἢ σάλπιγγι, τὰς προλαβούσας φωνὰς αἰεὶ ταῖς ἐφεξῆς ὑπερβάλλουσα.

第二部におけるフォーネーの用例を考察すると、第一にすべての用例において聖書との関連でフォーネーが使われていると指摘できる。聖書との関連というのは、まずは引用としてである。以下その一覧を挙げる。

20 節 (ヨハネ福音書 14 章 6 節、8 章 12 節)、31 節 (ヨハネ福音書 3 章 14 節)、35 節 (出エジプト記 5 章 2 節)、165 節 (出エジプト記 20 章 21 節)、184 節 (第一テモテ書 3 章 15 節)、207 節 (出エジプト記 32 章 26 節)、213 節 (出エジプト記 32 章 29 節)、254 節 (出エジプト記 33 章 20 節)、277 節 (ヨハネ福音書 12 章 14 節)、294 節 (マルコ福音書 1 章 24 節)、319 節 (出エジプト記 33 章 12 節、17 節 [LXX のみ])、以上が聖書の言葉を引きつつそれをフォーネーと表現するものとなる。

他には聖書箇所を指してフォーネーに言及するか、あるいは聖書箇所の説明として何かしらフォーネーに言及するものがある。たとえば 55 節では演説の準備のない者が不用意に人前で声 (フォーネー) を出すべきでないというが、それは出エジプト記 5 章 6 節以下の記事を指し、モーセがファラオを説得できず、逆効果であったことを注釈して記されている。また 62 節に「神の福音と使徒の至高なる声によれば」とあるが、パウロの声とは第一コリント書 3 章 12 以下節を指しており、終末時の火のことを述べた行となる。また 214 節では具体的な聖書箇所は明示されないが十戒の条文を指してフォーネーが使われている。少し興味深いのは、実際には声に出していないが、心の声が想定される場合に、フォーネーが使われている。118 節ではエジプトから脱出したヘブライ人たちを率いたモーセについて論述されるが、そこでこのような冒険に満ちた引率は心において神と対話していなければ不可能であるとグレゴリオスは言う。そこで声には出ていなくとも、心の声が神に届いていたという。これは声なき声についての観想になっている点が興味深い。また法の授与者モーセの言葉を指して、「法の声」という表現が 207 節と 213 節に見出せる。またこの文脈において同名異義を説明する場合にもフォーネーが使われているが、これもモーセの兄弟アロンに関する注釈となっている (210 節)。

第一部 74 節で取り上げられたバラムのロバの記事について、第二部では 293 節から 296 節にかけてその解釈が展開されており、その中で何度かフォーネーに言及されている。ここでは第一部と同様バラムのロバの言葉がフォーネーとされている (293 節に二箇所)。ただしグレゴリオスはこれら出来事を何か悪魔的なものと見なしている。そのため続く 294 節ではバラムと同様の事例が紹介されつつ「悪霊どもの声」(ἡ τῶν δαιμόνων φωνή) と述べて、マルコ福音書 1 章 24 節が引用されている。しかしバラムの言葉は決して害をもたらすフォーネーとならず、むしろバラクに対する託宣として「主が呪いをかけぬ者に、どうしてわたしが呪いをかけられよう」(民 23 章 8 節) との声を上げたという。

第一部において繰り返しフォーネーが使われていたシナイ山での啓示について、第二部でも 152 節から 167 節まで取り上げられており、8 箇所ではフォーネーが使われている。その大半はラッパの音（フォーネー）であって（152 節、158 節、159 節 [3 回]、167 節）、グレゴリオスにはこのラッパの音がよほど印象的であったことを示している。ただしこのラッパの音については、

- 1) 分節化された言語、つまり声として理解されていること、
- 2) 特に出エジプト記 19 章 16 節に抛り、この音（声）が徐々に大きくなっていったこと、

以上の二つがグレゴリオスの解釈の特徴となっている。この二点をもとにアレゴリカルな解釈が展開するが、159 節では救済史的な視点から、最初の音が律法と預言だとされ、これでは音が小さくユダヤ人には分からなかったとされ、そこで最後の音、つまりイエスによる福音宣教がなされるようになったという。こうした救済史的観点、歴史的観点と同時にアレテーの進捗としても解釈される（152 節）。同様に 167 節ではアレテーにおけるモーセの歩みが解釈され、ラッパの音が大きくなるとともに「常に自己よりいっそう高いものへと行って行く」（ἀεὶ ἑαυτοῦ γίνεται ὑψηλότερος）とされる。ここに暗闇とともにエペクタシスの解釈があらわれている。この著作においてモーセの人生が選ばれたのは、その生の歩みが出エジプトという出来事とともに描かれているからであり、モーセという聖書の偉人がグレゴリオスにとって完全なる生の理想であったからに他ならない。この点については出エジプト記 33 章 11 節をもとに 219 節にも確認できるが、319 節においては次のように述べられている。

モーセが可能な限りでの完全に到達したことの証言として（神が）彼について語っている「わたしは誰よりも汝を知っている」という神の声以上に信頼すべきものが見いだされるであろうか。さらに神ご自身によって「神の友」と名付けられており……。明らかにこれらすべての証拠は、モーセの生が完全性の山の頂に到達したことを示している。<sup>6</sup>

もちろんここでいう「完全性」とは到達した（静止）状態のことではなく、さら

6 Τὸ ἄρ' ἀποδοῦναι τὸν Μωϋσέα τὴν ἐνδεχομένην τελειότητα τίς ἂν ἡμῖν ἀξιοπιστότερος εὐρεθῆι μάρτυς τῆς θείας φωνῆς ἢ φησὶ πρὸς αὐτὸν ὅτι· ἔγνω σε παρὰ πάντας, ἀλλὰ καὶ τὸ φίλον αὐτὸν ὀνομασθῆναι θεοῦ παρ' αὐτοῦ τοῦ θεοῦ · · · Καὶ πάντα τὰ τοιαῦτα μαρτυρία σαφῆς ἐστί καὶ ἀπόδειξις τοῦ πρὸς τὸν ἀκρότατον τῆς τελειότητος ὅρον ἀναβεβηκέναι τοῦ Μωϋσέως τὸν βίον.

7 絶えず進み行くという動態が完全性であるという思想は、『モーセの生涯』の序論において論じられている（第一部 5 節から 10 節）。グレゴリオスは、事物の場合には何かの限界に区切られることで完成するが、しかし生や善というものは何らかの境界で区切られることで完成することはないという。たとえば生は死によって、善は悪によって区切られるのであるから、死や悪に区切られることで生も善も完成するのではない。むしろ反対物によって区切られることなく、止まることなく進み行くこと、増大することその動態自体が、生や善にとっては完全性を意味するという。生きること、善であることは不断に止まることなくそうあり続けることにこそその本態があるという。同様に第二部 234 節も参照。

にさらにより良いものとなって行く、その動態を指して述べられていることは指摘するまでもない。

『モーセの生涯』にはグレゴリオスのエペクタシス論が詳述されているのだが、フォーネーとはどのようにかかわっているのだろうか。『モーセの生涯』第二部 219 節から 255 節までひとつのまとまった部分であり、所謂「エペクタシス論」が論じられるとされる。ここでは出エジプト記 33 章 18 節に記されているモーセの願望（神の栄光を現わして欲しい）に対して、神がモーセに神の顔を見ることはできないと否定しつつ、その願望を叶えるのはどのようにしてなのかが論じられる。グレゴリオスはここで神はモーセの願いを拒否しつつ（顔を見ることができない）、しかし別の仕方ですその願いを叶えるという。それがエペクタシス論として展開するのである。

219 節－ 223 節：問題設定（フォーネーは、219 節、220 節の両節に三回）

224 節－ 227 節：モーセは絶えずより大きな者に成っていく

228 節－ 231 節：モーセの歩み

232 節－ 239 節：大胆な願望と神への無限なる歩みの必要（232 節）

240 節－ 255 節：「場所」「岩」とは何か（246 節、249 節、250 節、254 節に各一回）

この大きな文脈においてフォーネーは 7 回使われているが、しかし何か全体で一つのまとまりのある意味を担っているわけではない。その使い方は多様である。219 節では「神の声」として出エジプト記 33 章 11 節の神とまみえて話をした記事が指示されており、220 節では「天からの声」として出エジプト記 33 章 18 節から 23 節の概要が記されている。そして同節の「神的な声の約束」とは後にあらためて論じたい。232 節はおそらく出エジプト記 33 章 20 節あるいは 23 節を暗示したものとなっている。246 節は出エジプト記 33 章 21 節の「場所」のことを指す。249 節ではイエスの言葉を暗示しており、それはイエスが自らを道と呼んだことに言及している（ヨハネ福音書 14 章 6 節）。250 節は後述するが、254 節では出エジプト記 33 章 20 節に記されている神の顔を見て生きることができないが指示されている。以上それぞれの文章の流れの中でフォーネーに言及されており、全体として何かの意味・思想があるとは思えない。

#### 4. 出エジプト記 33 章 23 節とフォーネー

以上エペクタシスを論じた 219 節から 255 節までの文脈において、フォーネーには何か統一的な意味は認められないものの、それでもどこか聖書との関連性を示している。しかしこの中で 250 節のフォーネーは実はいささか奇妙な用例となっている。ここでは聖書箇所を指示しているようであり、聖書には確認されないもの、対応箇所の

ないものを含んでいる。以下訳出してみる。

というのも、神の背中にまといつく者にとりその右手の守りがあると言われているように、その手は、岩の中で神の声を待ち、背中に従おうと祈る者にふれるものであった。<sup>8</sup>

文脈としては出エジプト記 33 章 21 節から 23 節の観想を行っているが、ここに見られる「岩の中で神の声を待ち」は聖書のなかに対応するものがない。当該箇所では神は声を発するものではない。しかしグレゴリオスは、岩の中でモーセは神の声を待ち、岩から出てその背後を見る、すなわち聴従していくという。ちなみに「七十人訳」では出エジプト記 33 章の当該箇所は次のように記されている。

見よ、ひとつの場所がわたしの傍らにある。おまえはその岩の上に置かれる。わたしの栄光が通り過ぎるとき、わたしはおまえを岩の割れ目の中に入れ、わたしが通り過ぎるまで、おまえを私の手で覆う。そしてわたしは手を離す。そのときおまえはわたしの後ろ姿を見るが、わたしの顔はおまえには見られない。<sup>9</sup>

グレゴリオスが読んだ聖書はこの「七十人訳」と考えるのが自然であるが、私たちの手元にある「七十人訳」のテキストでは、その異読表を含めて通り過ぎたところで神はモーセに声をかけることはない<sup>10</sup>。ところがグレゴリオスはここで神の声を読み込むのである。こうした付加はただの筆の勢いでは説明できないし、偶然の産物とも言えないだろう。

この付加については、フォーネーとは別の観点、すなわち出エジプト記 33 章 23 節の解釈という視点から考察してみよう。教父の聖書引用・暗示箇所を網羅的に示した『ビブリア・パトリスティカ』の第五巻<sup>11</sup>はカッパドキア教父たちを扱っており、カイサリアのバシレイオス、ナジアンゾスのグレゴリオス、ニュッサのグレゴリオス、そしてイコニウムのアンフィロキウスの著作に確認される聖書引用・暗示箇所を示し

---

8 ' Ως γὰρ οὗτος φησι τῷ ὀπίσω τοῦ θεοῦ κεκολλημένω τὴν τῆς δεξιᾶς εἶναι ἀντίληψιν, οὕτω κακεῖ ἡ χεὶρ ἄπτεται τοῦ ἐν τῇ πέτρᾳ τὴν θείαν φωνὴν ἀναμένοντος καὶ κατόπιν ἀκολουθεῖν εὐχόμενου.

9 秦剛平訳『七十人訳ギリシア語聖書』、講談社学術文庫 2465、2017年、344頁。なお原文は次となる。  
καὶ εἶπεν κύριος Ἰδοὺ τόπος παρ' ἐμοί, στήση ἐπὶ τῆς πέτρας· ἡνίκα δ' ἂν παρέλθῃ μου ἡ δόξα, καὶ θήσω σε εἰς ὀπὴν τῆς πέτρας καὶ σκεπάσω τῇ χειρὶ μου ἐπὶ σε, ἕως ἂν παρέλθω· καὶ ἀφελῶ τὴν χεῖρα, καὶ τότε ὄψῃ τὰ ὀπίσω μου, τὸ δὲ πρόσωπόν μου οὐκ ὀφθήσεται σοι.

10 参照したのは次のテキストとなる。Rahlfs-Hanhart, eds. *Septuaginta, Editio Altera*, Deutsche Bibelgesellschaft Stuttgart, 1979.

11 *Biblia Patristica Index des citations et allusions bibliques dans la littérature patristique 5*, Editions du Centre national de la Recherche Scientifique, Paris, 2001, p. 164.



ている。出エジプト記 33 章 18 節から 23 節について引いてみると、23 節に関わる箇所は 18 節から 23 節までを扱う箇所、21 節から 23 節、そして単独で 23 節のみを扱う箇所、合わせて 22 箇所が挙げられている。これらのうちバシレイオスは 23 節を引用はしていないが、神を観るに至ったモーセの境涯を述べる行で暗示されているテキストがあり (PG30, 337D-340A)、そしてその『聖霊論』26 章 62 節に見られる解釈、すなわち「岩」を神とかかわる場所として捉え、「岩」とは聖霊を意味するというテキストが見いだせる<sup>12</sup>。

ナジアンゾスのグレゴリオスの場合も引用はないが、一連の神学講話のなかの第二講話に当たる『第 28 講話』第 3 節では「かろうじて神の姿、その背中を見たのであり、そのとき私は岩、すなわちわれわれのために受肉なされた御言葉によって覆われていた」と述べている<sup>13</sup>。このように「かろうじて神の背中を見る」といういささか否定的なニュアンスで語られるテキストは『第 32 講話』においても確認できる (16 節、同様に第 37 講話 3 節でも)<sup>14</sup>。あるいは被造物を通して知られる神の偉大さのことを、「神の背中」とするテキストは『第 28 講話』3 節に確認される<sup>15</sup>。なおアンフィロキウスには用例が確認されなかった。

以上ニュッサのグレゴリオスのようにこの聖書箇所を積極的に捉えて、神の背中を見て従うと解釈する例は確認されない。また引用する例もバシレイオス、ナジアンゾスのグレゴリオスの双方に見いだせない。ではニュッサのグレゴリオスの手にしていた聖書は「七十人訳」ではなく、これが記されていたのであろうか。『ビブリア・パトリスティカ』を引いてみると、ニュッサのグレゴリオスにおける出エジプト記 33 章 23 節の用例は一応 16 例が確認され、三者の中で多いことが分かる<sup>16</sup>。そのほとんどは『モーセの生涯』ではあるが、『雅歌講話』と『テオフィロスに宛てて』のテキストも挙がっている。『雅歌講話』第 12 講話 (GNO VI, 354, 8; 356, 9) ではモーセが絶えず大きくなっていったことに言及して、33 節の説明が見られるものの、フォーネーに言及することはない。また『テオフィロスに宛てて』(GNO III-2, 122, 8) では「光」や「暗闇」といったモーセに対する神顕現の様態が列挙され、その中の一つに神の「背中」が挙げられているのであって、フォーネーに言及するものではない。また『モー

12 B. Pruche, *Basile de Cesaree Sur le Saint-Espirit*, SC17 bis, 1968.

13 P. Gallay, *Gregoire de Nazianze Discours 27-31*, SC 250, 1978.

14 C. Moreschini, *Gregoire de Nazianze Discours 32-37*, SC 318, 1986.

15 テキストについては注 13 を参照。

16 本文で取り上げた『雅歌講話』と『テオフィロスに宛てて』を除き、列挙しておきたい。『モーセの生涯』第二部について、出エ 18 - 23 ; 230 節、232 節、235 節、出エ 21 - 23 節 ; 220 節、259 節、出エ 23 節 ; 221 節、223 節、239 節、240 節、249 節、252 節、254 節、263 節。なお以下ではこれらすべての用例についてその用法を確認することなく、関係するものだけに限定して論じていく。なお不思議と *Biblia Patristica* のリストには 250 節が挙げられていない。

セの生涯』のなかでエペクタシス論を扱う 219 節から 255 節以外の節も挙げられているが、なかでも 259 節には 21 節から 23 節がまとめられて次のように記されている。

〔モーセは〕 神的な場所のなかを走りつつ岩の上に座し、その岩の穴に取り囲まれて神の御手に覆われ、決して対面で見ることなく、その背中を見つつ、導き手の背後に従いゆくのである。<sup>17</sup>

ここにフォーネーは使われず、また「呼びかけ」にも言及されない。用いた聖書にも記されず、あくまでもグレゴリオスはエペクタシス論を展開する 219 節から 255 節において、出エジプト記 33 章 23 節の解釈のなかにフォーネーを挿入しているのである。では、このフォーネーがエペクタシス論とどのようにかわることになるのか、これを検討しなければならない。

## 5. フォーネーとエペクタシス論<sup>18</sup>

『モーセの生涯』においてエペクタシス論は、239 節に見いだせる定式、「神を観るとは、決して欲望の満足を見出さないこと」とまとめられるが、その具体的な内容が 240 節以下で論じられることになる。つまり出エジプト記 33 章 21 節から 23 節に記されている記事、すなわち神の顔を見ることはできないが、神は一つの場所を示し、その岩の穴のなかにモーセを置き、手で覆いつつその場所を通り過ぎる。神が手を離すとモーセは神の背後を見、止まることなく神に従いゆくことというものである。神の顔でなくその背後を見ること、これが神に聴従することと解され、エペクタシス論が展開していくのである。グレゴリオスはこのエペクタシス論を展開するにあたり、意図的に出エジプト記 33 章 23 節に神のフォーネーを挿入している。このことはすでに考察した 250 節において確認された。実は、同様の記事は先んじて 220 節においても確認される。そこでは全体の要約をしつつ、当該箇所については次のように述べている。すなわち「モーセは呼ばれて穴から出ると、呼ぶ者の背中を見る」<sup>19</sup> とある。ここでは神はモーセに「呼びかける」(προσκαλέω;καλέω) ことになっている。また 223 節にも確認され、そこでも「呼びかけ」(ἡ κλήσις) に言及されている。モーセが穴

17 ὁ ἐν τῷ θεῷ τόπω δραμῶν καὶ ἐπὶ τῆς πέτρας ἐστῶς καὶ τῷ χωρήματι ταύτης περιεχόμενος καὶ τῇ χειρὶ τοῦ θεοῦ σκεπαζόμενος καὶ κατόπιν τῷ ἡγουμένῳ ἐπόμενος, ὁ μὴ ἀντιβλέπων, ἀλλὰ τὰ ὀπίσθια βλέπων.

18 なお『雅歌講話』においてもフォーネーとエペクタシス論との関連性は確認され、拙論を参照。「ニュッサのグレゴリオス『雅歌講話』における「声」の神学」、特に 36 頁から 38 頁。またエペクタシス論については拙著『神認識とエペクタシス』(創文社、1998 年)を参照(特に第五章)。

19 τὸν δὲ Μωϋσῆα προσκληθέντα καὶ τῆς ὀπίσθιοις ἔξω γενομένου τὰ ὀπίσθια ἰδεῖν τοῦ καλέσαντος.

から出るのは、神が通り過ぎたあとその御手を外すからではなく、外されて呼びかけられるからだとしてグレゴリオスは解釈しているのである。さらに249節では次のように記されている。

ここまで到達し神の御手によって覆われた者は（御手とは諸存在を創造する神の力、その肩を通して万物が生じた神の御独り子であろう。その方は走る者の場所であり、またご自身のフォーネーに従えば<sup>20</sup> 走る道となり、確かな者たちにとっては岩となり、休息する者たちの家となる）、まさに御言葉が約束しているように、呼び掛ける方に聴き、呼ぶ者の背中を見るであろう。即ち、法が命じるように、神なる主の背中に従い歩むのである。<sup>21</sup>

ここでは「呼び掛ける方」(τοῦ προσκαλουμένου)、「呼ぶ者」(τοῦ καλοῦντος)と二度も出てくるが、文脈上出エジプト記33章23節について述べられていることは明らかであろう。グレゴリオスのエペクタシス論は、アレテーの道をひたすら進み行くことを述べ、これが神の無限性に応じたものになっているわけだが、そこには「呼びかけ」という要素が重要であることが認められる。神の呼びかけに応じてモーセは導かれるままに進み行く。『ビブリア・パトリステイカ』に挙げられている出エジプト記33章23節に関わるテキストなかで252節、254節では、いずれも背中に従いゆくことが語られている。さらに263節では神の背後にいることとは、アレテーへの導きのためであるという。

では、呼びかける神とは誰のことなのだろうか。出エジプト記33章21節にある「岩」とはキリストを指すとグレゴリオスは考えており（248節、249節）、神の呼びかけはキリストの呼びかけと重なっている。そのため神の背面に従いゆくことは、キリストに従いゆくことを意味している。この点で興味深いのは、シナイ山での雷鳴・ラッパのことを観想する159節で、律法・預言に対してキリストの到来をフォーネーの増大として解釈していたことである。たとえば『雅歌講話』ではこの救済史の出来事について、律法と預言はフォーネーであるのに対してキリストの到来は受肉・顕現として視覚的に解釈をする行がある（第五講話；GNO6, p.140f.）。しかしここではいずれもフォーネーの強度、大きさとして捉えており、次第に大きくなっていき受肉した神キリスト自身による宣教に至る。ここでのラッパの音は「神の本性に関する宣教」

20 ヨハネ福音書14章6節。

21 Ὁ δε μέχρι τούτου φθάσας καὶ ὑπὸ τῆς τοῦ θεοῦ χειρὸς σκεπασθείς, καθὼς ὁ λόγος ἐπηγγείλατο (χειρὶ δ' ἂν εἴη τοῦ θεοῦ ἡ δημιουργικὴ τῶν ὄντων δύναμις, ὁ μονογενὴς θεὸς δι' οὗ τὰ πάντα ἐγένετο, ὃς καὶ τοῖς τρέχουσι τόπος ἐστίν, ὁδὸς τοῦ δρόμου γινόμενος, κατὰ τὴν ἰδίαν φωνήν, καὶ πέτρα γίνεται τοῖς βεβαίοις καὶ οἶκος τοῖς ἀναπαυομένοις), τότε ἀκούσεται τοῦ προσκαλουμένου καὶ κατοπιν τοῦ καλοῦντος ὀφθήσεται, τουτεστιν· ὀπίσω Κυρίου τοῦ θεοῦ πορεύσεται, καθὼς ὁ νόμος παρεγγυᾷ.

(τὸ περὶ τῆς θείας φύσεως κήρυγμα) のこととグレゴリオスは言う。また同じ文脈にある 169 節においては、モーセ自身の歩みとして見れば「常に自己よりいっそう高いものへと行って行く」こととしてエペクタシス的に捉えられるが、それは対応する声が大きく明瞭になっていくからである。

エペクタシスという不断の歩みは魂の単独の業、行為なのではなく、声を上げて呼びかけるキリストに従うことということになる。グレゴリオスはそのため、岩の割れ目に入り、通過した神に従うことについて論じつつ、そこに神の呼び声があると理解したのであろう。エペクタシスには、呼びかける「声」というものが不可欠なものだと言える。251 節は、250 節の「岩の中で神の声を待ち、背中に従おうと祈る者」と語られたことに直接続いて、「また、かつてモーセに語り掛けた主はご自身の法を完成すべく来られ、同様に弟子たちに謎のうちに語られたことの意味を明らかにして説明を果たされた。」<sup>22</sup> と記し、福音書のいくつかの記事を提示している。ここで記されている「かつてモーセに語り掛けられた」とは文脈上、250 節に続いており、出エジプト記 33 章 23 節と関連する。また語り掛け、呼びかけるのは「主」、すなわちキリストであり、その具体的な言葉とは福音書の言葉なのである。

## むすび

本稿における『モーセの生涯』におけるフォーネーの研究は終着点にたどり着いたように思われる。以下その主な成果を箇条書きにまとめてみる。

- 1) 馬車レースの歓声を述べる第一部 1 節の用例を除くと、『モーセの生涯』におけるフォーネーの用例はすべて聖書と関連したものとなっている。
- 2) 出エジプトの後シナイ山における雷鳴・ラッパのフォーネーは、「音」というよりも、分節化された意味ある「声」として捉えられている。また、さらにさらに大きくなっていくその声を受容するモーセが絶えず自己超越を重ねて、いっそう前進していくものと捉えられている。
- 3) 出エジプト記 33 章 23 節に関するグレゴリオスの解釈は独特のものであって、グレゴリオスはエペクタシス論との関連でフォーネーの要素を加えて神の背中を見るところとする。
- 4) エペクタシス論においては人間・魂の側の無限進行が論じられるところではあるが、グレゴリオスはここに神の呼びかけの要素を加える。つまり神の呼びかけに

---

<sup>22</sup> Ἄλλὰ καὶ ὁ Κύριος, ὁ τότε τῷ Μωυσεῖ χρηματίσας, ὁ πληρωτὴς τοῦ ἰδίου νόμου γενόμενος, ὁμοίως πρὸς τοὺς μαθητὰς διεξέρχεται, ἀπογυμνῶν τῶν ἐν αἰνίγματι ρηθέντων εἰς τὸ ἐμφανὲς τὴν διάνοιαν·

応じて人間は止まることなく神に向けて前進するのである。その呼びかけが福音書の言葉であることは『モーセの生涯』において確認された。『モーセの生涯』におけるエペクタシス論に神の呼びかけ、神の声ということが認められることを確認できたことは、本研究の特筆すべき成果であると思われる。

以上のようにまとめられるが、それにしても、エペクタシス論における神・キリストの声、呼びかけとは何か。グレゴリオスの時代においてそれは具体的にどのような声、呼びかけであったのか。おそらくその声は聖書の言葉であり、礼拝における聖書朗読や説教の経験を指しているものと思われる。

\*本研究は、科研費（基盤研究（C）研究課題「カッパドキア教父における「神の声」としての聖書」）の助成を受けてなされた研究の一部である。ここに記して謝意としたい。

表 1 ※右端の「リスト番号」とは TLG の検索結果のリストの順番を指すが、ここでは無視してもらってかまわない。

『モーセの生涯』における φωνή の用例と用法 by 土井健司						
番号	語形	φωνή を含むギリシア語	訳	意味・聖書箇所	部・節	備考
1	φωνή	τῆ πρὸς τοὺς ἀγωνιζομένους φωνῆ	闘う者たちへの声援によって	競技において競技者にむけた声・声援	1・1	馬車競技の譬えはナジアンゾスのグレゴリオスにも見いだせる。PG36, 513D-516A
2	φωνή	ἡ θεία φωνή	神の声	イザヤ51章2節・引用	1・11	「あなたたちの父アブラハムと、あなたたちを生んだ母サラのことを想い見よ。」
3	φωνῆς	παρὰ τῆς θείας φωνῆς	神の声によって	イザヤ51章2節	1・12	上述
4	φωνή	ἡ τοῦ φωτός ἐκείνου φωνή	その光の声	出エ3章5節	1・20	履き物を脱ぐように促した声のこと
5	φωνῆ	τῆ φωνῆ καὶ τῷ λόγῳ	声と言葉によって	出エ14章13節以下	1・29	エジプト軍を背後にしたへブライ人たちが励ますもの
6	φωνῆς	φωνῆς ἀνοθεν καταπληκτικῶς ἐπιρηγημένης	驚かすようにつんざく天からの音	出エ19章16節	1・44	「三日目の朝になると、雷鳴と稲妻と厚い雲が山に臨み、角笛の音が強く鳴り響いたので、宿営にいた民は皆、震えた。」(新共同訳)
7	φωνῆς	τῷ βαρεῖ καὶ καταπληκτικῷ τῆς φωνῆς	音の強さと恐ろしさ	上記	1・44	これに続いて、音が近づくとつれていつぞう恐ろしいものなつて行つたと記され、出エ19章19節「ラツバの音はますます力強く鳴り響いた」(ισχυροτεροι : LXX も同様) のこと。
8	φωνή	Ἡ φωνῆ αὐτῆ	その音自体	上記 (の説明)	1・44	「神の力によって音の強弱などに空気がロゴスを分節化することで、その音自体も分節化されていた。」
9	φωνητικῶν	τῶν φωνητικῶν ὀργάνων	音声器官	上記 (の説明)	1・44	上記
10	φωνή	ἡ φωνή	その音	上記 (の説明)	1・44	「その音は進むにつれて増大し、ラツバは、続く音以前の音を常に激震するので自己を超越しているのである。」
11	φωνάς	τὰς προλαβούσας φωνάς	続く音 (pl.)	上記 (の説明)	1・44	上記
12	φωνῆ	τῆ φωνῆ τῆς ὄνου	ロバの声	民22章28節	1・74	ロバがバラムに語った言葉のこと
13	φωνάς	τοιαύτας φωνάς	次のような声 (pl.)	民24章3節以下	1・74	バラムがへブライ人たちについての託宣
14	φωνή	ἡ τοῦ Εὐαγγελίου φωνή	福音書の声	ヨハネ14章6節、8章12節の引用	2・20	「神は真理である」、「真理は光である」との引用
15	φωνῆς	διὰ τῆς τοῦ Εὐαγγελίου φωνῆς	福音書の声を通して	ヨハネ3章14節の引用	2・31	杖が蛇に変わった奇跡 (出エ7章10節) について、受肉との関連で解釈する。
16	φωνῆς	τίς ἐστιν οὗ εἰσακούσομαι τῆς φωνῆς αὐτοῦ;	「私がその声を聴くお方は誰なのか?」	出エ5章2節の引用	2・35	ファラオの科白 (LXX と一致)
						リスト番号
						23
						9
						39
						10
						24
						40
						41
						11
						52
						12
						4
						25
						5
						13
						42
						43

17	φωνῆς	τῆς ἐν τῷ λαῷ φωνῆς	人びとの間で言葉を	出エ5章6節以下	2・55	「これらのことを通して歴史は一体何を教えているのであろうか。多くの人びとへの講話に向けたこのような導きによって言葉（ロゴス）を準備していない者は、大胆にも人びとの間で言葉（フォナー）を語るべきではない。」* モーセの説得にファラオが反対の命令を下したこと（逆効果）について。	44
18	φωνῆς	παρὰ τῆς ὑψηλῆς τοῦ Ἀποστόλου φωνῆς	使徒の至高なる声によれば	第一コリ3章12節以下	2・62	列り株=燃料（地獄）について「神の福音と至高なる使徒の声によれば」と言う。福音と使徒の声とが並置されている。	45
19	φωνήν	κατὰ τὸ φαινόμενον φωνήν	現象的な声によって	モーセについて	2・118	エファトを立ちまわったへブライ人たちが導くモーセについて、人びとを鼓舞するに先立って神との対話のうちにあったという。118節は冒頭「このようなることは指導者の心が神と話をすることでなかつたら生じなかつたであろう。」と述べて、次のように記される。「啓（＝モーセ）はイスラエル人に勇気を出すように命じたが、神に向かつては即ち現象としての声を出すことがなかつた。それでも神ご自身によって呼びと証言されている。私が思うに聖書は、そのようなる声はよく響き、神の耳にまで到達したが、何かの堅強あるいは呼びびではなく、深い心からもたらされた考察のことなのである。」	29
20	φωνή	ἐκείνη ἡ φωνή	そのようなる声	同上	2・118	同上	14
21	φωνήν	τὴν τῶν σαλπύγγων φωνήν	ラッパの音 (pl.)	出エ19章19節	2・152	アレテーに向かった生の歩みにおいて経験されることのひとつとして言及されるのみ。	30
22	φωνάς	τὰς τῶν σαλπύγγων φωνάς	ラッパの音 (pl.)	出エ19章19節	2・158	「モーセのようなる人であれば、急頂の高みに至り騒ぐことでエズパの音を響け取る余地があるのであろう。その音について歴史のロスは前述することですますます力強く響くと述べている。まことに神の本態についての置敷こそは、膨張を驚かせるラッパであって、はじめから其意いのだが、終わりにおいてははいっそ大きく響きに響きに到達するものである。」	6
23	φωναί	αἱ πρόται φωναί	その最初の音 (pl.)	律法と預言を指す	2・159	律法と預言もイエスについて告知していたのだが、弱い音であったので、ユダヤ人たちの耳にはほとんど届かなかつた。	1
24	φωνήν	τὴν φωνήν τῶν σαλπύγγων	ラッパ (pl.) の音	同上	2・159	同上	31
25	φωναί	Αἱ τελευταῖται φωναί	最後の音 (pl.)	福音宣教のこと（イエス、パウロ等など）	2・159		2
26	φωνήν	τὴν ἀνωθεν φωνήν	天からの声	出エ19章16節	2・160	モーセを信頼して聽従することを述べる。6番を参照。	32

27	φωνή	τῆ θεῖα φωνῆ μαρτυρούμενον	神的な声によって証されたもの	出エ20章21節、詩17編12節それぞれ引用	2・165	「モーセは神のおられる暗闇の中へと入っていった。」「神は暗闇を隠れ場所とする。」(164節)	26
28	Φωνάς	τὰς τῶν σαλπύγγων φωνάς	ラッパ (pl.) の音 (pl.)	出エ19章16節	2・167	モーセがますますラッパの音をはっきりと聴くようになる。	7
29	φωνῆ	τῆ ἰδίᾳ φωνῆ	彼自身の声によって	第一テモテ3章15節引用	2・184	天上の幕屋=キリスト、これに倣って地上の幕屋を作ることが論じられ、その柱について言及。テモテを柱とするパウロの言葉の引用 (第一テモテ3章15節)。	27
30	φωνήν	πρὸς τὴν φωνὴν τοῦ κελεύοντος	命ずるものの声に向かって	第一テモテ4章16節を参照	2・191	第一テモテ4章16節以下では大天使の声が聞こえて神のラッパが鳴ると主が降ってきて、われわれが「空中で主と出会うために」死者と「一緒に雲に包まれて引き上げられる」という。「声」とは大天使の声のこと。	33
31	φωνῆ	ἡ τοῦ νόμου φωνῆ πᾶσιν ἐγκελευομένη	万人に向けて命ずる法の声 (=言葉) は	出エ32章26節の引用	2・207	金の子牛の像をめぐってアロンとその新派の人びとに対してモーセは自分に与する人びとに向けて語る場面。「法の声」=モーセ (νομοθετης) の言葉	15
32	φωνῆς	ἀπὸ τῆς αὐτῆς φωνῆς	(「兄弟」という) 同じ音声 (=言葉) によって	同名異義の説明	2・210	アロンについて「兄弟」と言われるが、それは同名異義的であって、対立する意味で用いられていると説明。偶像崇拜に陥った「兄弟」もいれば、ファラオに対峙する「兄弟」もいる。	46
33	φωνῆς	παρὰ τοῦ νόμου τῆς φωνῆς ἐκείνης	法から次のような声を (聴く)	出エ32章29節の引用	2・213	*31も参照。法=モーセ	47
34	φωνάς	αὐτοῦ τοῦ Θεοῦ τῷ λίθῳ τῆς φωνῆς ἐντυπώσαντος	神ご自身が石に声 (pl.) を刻んでいくことで	十戒の条文 (pl.)	2・214	独立属格句	8
35	φωνήν	φωνὴν ὄφεος ὀνομάζει	蛇の声と呼んでいる	創世3章4節	2・216	創世記で毒蛇について「蛇の声」と呼ばれているという。おそらく誤認する蛇の科白のこと。	34
36	φωνήν	φωνὴν ἐξ οἴνου ἀρχόντων	酒に酔った者たちの声	出エ32章18節 (LXX)	2・216	voice of drunken singing (英訳)	35
37	φωνῆς	παρὰ τῆς θείας φωνῆς	神の声によって	出エ33章11節	2・219	神と友と友が話すようにまみえたという箇所	48



38	φωνή	ἡ ἀνοθεν φωνή	天からの声	出エ33章18節から23節	2・220	モーセの願いに對する神の応答：満たすが叶えない。ここでグレゴリオスは「通り過ぎると呼び出す (προσκαλεσασθαι)。呼び出された (προσκληθέντα) モーセは穴から出ると、背後を見る」と書くが、しかし「呼び出す」とは聖書には書かれていない！ 43番も参照。	16
39	φωνῆς	τῆς θείας φωνῆς τὴν ἐπαγγελίαν	神の声の約束	同上	2・220		49
40	φωνή	Ἡ θεία φωνή	神の声	出エ33章20節、or23節	2・232	願いをかなえつつも、ある意味で拒否する。	17
41	φωνή	ἡ θεία φωνή	神の声	出エ33章21節	2・246	「場所」と呼んでいる。	18
42	φωνήν	κατὰ τὴν ἰδίαν φωνήν	ご自身の声によれば	ヨハ14章6節	2・249	私は道であるというキリストの言葉	36
43	φωνήν	τὴν θεῖαν φωνήν ἀναμείνοντος	神の声を待ちつつ	? (出エ33章23節)	2・250	出エ33章23節あたりのことと推定されるが、そこには神は声を発するとは記されていない。(LXXにも確認できない。)	37
44	φωνή	ἡ θεία φωνή	神の声	出エ33章20引用	2・254	「ひとは主の顔を見て、なお生きていることはない。」	19
45	φωνή	ἡ τοῦ Κυρίου φωνή	主の声は	ヨハ12章14節引用	2・277	音節の配(民21章4節から9節)について「モーセが荒野で鞭を挙げたように、人の子をまた挙げられねばならない。」の引用	20
46	φωναῖς	ταῖς τῶν ἀλόγων φωναῖς κατὰ τινὰ δαμονίαν ἐνέργειαν	何か悪魔的な働きのもと動物たちの声(pl.)によって	バラムについて	2・293	動物=ロバ *複数なのは一般論的な意味合いを込めているから。	3
47	φωνῆς	ἐκ τῆς φωνῆς τῶν ἀλόγων διδασκαλίαν	動物たちの声から教えを	バラムについて	2・293	動物=ロバ *複数なのは一般論的な意味合いを込めているから。	50
48	φωνή	Λέγει ἡ τῶν δαιμόνων φωνή	悪霊たちの声は言う	マコ1章24節、5章7節、ルカ4章34節の引用	2・294		21
49	φωνήν	φωνήν λυπηρὴν τε καὶ ἀπερσίνουσαν	苦をもたらし混乱をもたらし声	バラムについて	2・295		38
50	φωνή	ἡ φωνὴ τοῦ εἰς κατάρταν παραλημμένου	呪いをかけるために招かれたものの声	民23章8節	2・296	バラクに對するバラムの託宣	22
51	φωνῆ	τῇ ἰδίᾳ φωνῇ	ご自身の声によって	マタ5章19節	2・304	「主は福音書においてご自身の声で情念の根を断ち切る・・・」	28
52	φωνῆς	τῆς θείας φωνῆς	神の声以上に	出エ33章12節、17節(LXXのみ) 引用	2・319	「モーセが可能な限りでの完全に到達したことの証言として、(神が) 彼に語っている『わたしは誰よりも汝を知っている』という神の言葉を以上に信賴すべきものがあるか。さらには神ご自身によって『神の友』と名付けられており、・・・申らかにこれらすべてへの証拠は、モーセの生が完全性の山の頂上に到達したことを示している。」	51

\* 38番 43番についてLXXの出エ33章21節から23節は次のように記されている。「見よ、ひとつの場所がわたしの傍らにある。おまえはその岩の上に置かれる。わたしの栄光が通り過ぎるとき、わたしはおまえを岩の割れ目の中に入れ、わたしが通り過ぎるまで、おまえをわたしの手で覆う。そしてわたしは手を離す。そのとき、おまえはわたしの後ろ姿を見るが、わたしの顔はおまえには見られない。」(秦剛平訳)

\* 通り過ぎた後に神はモーセに「呼びかける」とは書いていない。

【Abstract】

The usage and meaning of φωνή in *De Vita Moysis* by Gregory of Nyssa

DOI Kenji

In this treatise I examined all passages in which Gregory of Nyssa uses the concept of φωνή (voice, sound) and determined the meaning of it in his writing of *De Vita Moysis*.

I have retrieved the concept from the TLG database. The result is that Gregory of Nyssa uses it 52 times in *De Vita Moysis*. I tabularised these usages and investigated their meanings. The conclusions of the investigation are as follow:

- (1) All usages of the φωνή except in I,1 are biblical.
- (2) The φωνή used in Exod. 19:16-19 originally means the sound of thunder or trumpet in the biblical texts but is interpreted as the voice from God by Gregory. In *De Vita Moysis* Gregory uses the concept to signify the expression of something personal, not the sound of the inorganic matter.
- (3) The φωνή used for the interpretation of Exod.33:23 is original, because he added the concept to that clause. In the original text of Exod. 33:23 we cannot find any expression of φωνή. In II, 250, for example, Gregory said that Moysis, who is placed in the rock by God, expected to be called by God (Jesus Christ).
- (4) In II, 219-255 of *De Vita Moysis* Gregory discusses the so-called *epectasis* (i.e., the everlasting progress to God), interpretating the Exod. 33:18-23. Through this study, we may discover the important role of voice of God (probably the biblical texts read in the liturgy or sermons spoken by the priest) in the *epectasis*. God calls the people, and they may make progress towards God.